

参加者からのご質問	回答大学	回答
【千葉大学へ】 企業と一緒にPBLプログラムを開発する過程や役割分担、学生の専攻とのかかわりについて教えてほしいかったです。	千葉大学	デザインワークショップの場合、学生の専攻はほとんどデザインに限られています。ただ、その中で、グラフィックデザイン、製品デザイン、空間デザインなど細分化されています。参加する企業によって、テーマも変わっていきます。たとえば、製品系の企業が入るとだいたいの参加学生の専攻比率は製品デザインの方が多いです。ブランディングデザインが中心のテーマになるとやはりグラフィックデザインの学生が大幅に参加する傾向があります。企業として、このようなワークショップは学生の新しい発想やアイデアをその成果として期待することが多いです。そのため、テーマを決めるときには、大学と協議し、すぐ解決できる課題より近未来に実現可能な課題が設定できるようにすることが多いです。テーマの設定以降は、基本的に大学がメインになって、ワークショップを進行します。
【千葉大学へ】 受け入れ態勢を整えるための資金確保は、どのようにされたのでしょうか。	千葉大学	海外からの受け入れについては、やはり予算の確保が大事だと思います。大きくは3つのパターンがありますが、1つ目、参加企業や自治体からワークショップに関しての予算を準備することです。2つ目、文部科学省など政府からのプログラムに申請し予算を確保することです。3つ目、海外大学が予算を確保して日本へのワークショップに参加するパターンもあります。
【福岡工業大学へ】 今後の展開またはプランについて。どのように福岡工業大学が中心となってgPBLをクリエイトしていくのか等伺いたい。	福岡工業大学	福岡工業大学のグローバルPBLは、アジアの玄関口である福岡に位置する本学の地の利を活かし、アジア地域の協定校などの海外大学と協働する教育プログラムとして開発、実施されてきました。 これまでの実施において、参加学生数、恒常的な教育プログラムとしての提供体制、予算の確保など、様々な課題が認識されています。今後は、学内のサポート体制を更に強化すると同時に、九州地区の他の大学や国内外の企業等を巻き込みながら、より多くの学修分野でのプログラムを開発・実施し、本学の実践型人材育成という教育目標に大きく貢献する取組として進化させていきます。
【中央大学へ】 オンラインgPBLを実施した時の学生たちの変化(成長)が感じられたと思うのですが、渡航型と比較してどのように思われたか伺いたいです。(比較できるものでもないかもしれませんが)	中央大学	・ポジティブ面 - 費用が安価、研究活動を行いながら参加できる、gPBLはオンラインでも可能 ・ネガティブ面 - 現地学生とのコミュニケーションが限定的、現地状況を肌で感じるができない
【中央大学へ】 今後の展開またはプランについて。次は、中央大学がどのようにgPBLをクリエイトしていくのか等伺いたい。	中央大学	・すでに東アジアの大学と実施済み ・今後、他大学様に門戸を広げるには体制の拡充が必要
【芝浦工業大学へ】 プログラムの参加費など学生一人当たりの参加費用と大学の予算はいくらぐらいになるでしょうか。	芝浦工業大学	・派遣PBLでは、参加費用一人当たり約20万～25万（国地域により異なる）です。なお、渡航先および学生の成績によって異なりますが、4万円～10万円の奨学金が支給されますので、その分学生の持ち出しは減ります。また別に現地での食費などは参加学生が負担します。 ・受入PBLでは、プログラムにもよりますが、主に以下の出費が発生することがあります。交通費、施設利用・入館料、宿泊費（都内ゲストハウスなどの場合 約2000-4000円/泊/人）、視察旅行費用。なお、受入PBLに参加する留学生は奨学金（60,000円もしくは80,000円）がもらえるので、ほぼそれで賄えているかと思います。 ・オンラインPBLでは、各学生が使用する材料、器具類等（電子機器や部材）などのみで、学生の負担はあまりないケースが多いです。 ・なお実施にかかる大学の予算ですが、現状は主として文部科学省SGU事業予算を使用しております。アジアの国への10日間の派遣プログラム、教員1名が引率するとした場合、約35万円（教員旅費20万円、消耗品・通信費手土産代など15万円）ほどです。参加学生数が多かった場合は引率する教員数を増やしたり学生アルバイトが同行することがありますので、その場合は費用が増えます。
【芝浦工業大学へ】 PBL科目の設置に必要なサポート体制とは、事務の役割を可能であればもう少し具体的にご教示いただければと存じます。	芝浦工業大学	芝浦工業大学では教職学協働でグローバルPBLを実施しています。まず正規課程の授業科目と位置付けておりますので、科目設置は他の科目同様に学科教員が行っております。その他、事務職員は予算の管理執行、参加学生への奨学金支給、学生バイト対応などを行っております。その他業務委託なども含めて、本学の取り組みを後期の演習機会にて紹介できればと考えております。
【芝浦工業大学へ】 専攻が同じ学生同士のほうが専門性が深まるようにも思い、一方で多様性を生かしたgPBLも学生たちにとって有益と思い、それぞれの長短を具体的に伺ってみたいと思いました。	芝浦工業大学	大変鋭いご意見をお寄せいただきありがとうございます。 これは、グローバルPBLの目的に大きく依存するかと思います。言い方を変えると、専門性を深めるか、あるいは、グローバルコミュニケーション力を育むことをより重視するかといった目的によって（対象学年にも依存）、いずれにも対応可能ということです。 以下、芝浦工業大学の材料工学科のグローバルPBLを例に挙げると、本グローバルPBLは、元々学科の授業科目の一つとの位置づけで、グローバルPBLの相手校の選定やプログラムを練り上げてきた経緯があります。2021年度は、新しい試みとして、我々の材料工学科のプログラムに他大学の応用化学科の学生に参加いただきましたが、PBLのトピックを「3Dプリンタによる新材料創製」や「ナノマテリアル」としたこともあり、むしろ多様な意見やアイデアに触れる機会が得られたのではないかと思います。したがって、材料と応用化学といった範囲の学問分野の違いでは、デメリットはほとんどなく、メリットが大きいかと感じております。 一方、例えば同じ「3Dプリンタによる新材料創製」に対しても、例えばベンチャー企業を立ち上げて商品を売るといったところまでを対象とすれば、工学系にとどまらず文系の学問を専攻している学生も大いに活躍できるのではと想像しております。この場合、1年生よりは高学年の学生の方が適しているかと思いますが、参加学生が低学年であればもっと一般的なトピックを選定すれば参加学生の学問的な多様性を十分生かせるかと思っています。 このように、グローバルPBL自体が様々な学年（学習段階）や参加学生に対応できる多様性を持ったプログラムですので、長所を生かしたプログラム設計を行うことで参加学生にとって有益なプログラムとなるかと思っています。